

## 「2024年度バルセロナ大学スプリングスクール派遣報告書」

京都大学文学部3年 矢島 隼人

## ① 学習成果

自分にとって今回の短期留学によって最も変化があったことは、海外に行くことについてのハードルが大きく下がったことである。留学前の海外経験は高校の修学旅行でオーストラリアに行ったのみであり、それは同級生と一緒にほとんどツアーのプラン通りに動いただけなので主体性は求められていなかった。しかし今回の留学では航空券や宿泊は旅行社に代行してはもらったが現地での移動や自由時間の使い方は学生にゆだねられており、私の場合、半分くらいは1人で行動していたので主体的な計画性を養うとともに、特に目的地を決めずに周遊するなどの経験を通して本当の海外の楽しみ方を理解できたように思う。私は大学で2年間スペイン語を履修し現地での生活に必要な最低限の語学力はあるつもりであったが、実際に現地で生活してみると言語によって深刻に困るようなことはないとはいえ、思うように話せなかったりメニューが読めなかったりなどした。それらの経験はスペイン語の学習意欲をますます膨らませるものであり、日本でスペイン語のスキルアップをしたのちに再びどこかのスペイン語圏に足を踏み入れたいと考えている。また、今回の留学先がマドリッドではなくバルセロナであったことは大きな意味があったと感じた。スペイン国内でのバルセロナの独自性についてはバルセロナ大学の授業やバルサの試合観戦を通して感じられ、日本には相応するものがない意識であった。

## ② 海外での経験

2週間を通してキリスト教世界を全身で味わうことができたと思う。当然ながら街を歩いているだけでもいたるところに教会があったりゴシック様式やロマネスク様式の建築がある。国内では例えば沖縄に行ったとしても石壁や赤瓦などの建築の違いはあるものの2週間もすれば慣れてくる。しかし初めてのヨーロッパ、バルセロナは建築、人、食べ物など全てから新しい発見があり、特に生物が好きな私にとっては街路樹一つをとっても面白く、2週間過ごしても最後まで新鮮味が失われることはなかった。一つの例としてモンセラートに訪れたときの感想を記す。モンセラートはバルセロナから鉄道とロープウェイで二時間ほどかかる山の中腹に位置し、キリスト教の聖地とその絶景が有名である。まず乗る鉄道はほとんどすべてが落書きで汚されており、車内ではアコースティックギターを背負った中年男性が歌っている。車窓からは老年期地形とブタの放牧、オリーブがみえる。モンセラートの修道院ではマリア像の手に触れ、涙する敬虔な人もいた。

## ③ プログラム内容

プログラム内容について、総じて満足できたが改善した方が良かった点もいくつかあった。まず最も良かったのがバルセロナ大学の学生との交流である。英語でディスカッションをしたり、プレゼンの準備を手伝ってもらったり、日本語を教えたり、という形で交流をしたが、私がマイノリティー側として同年代の海外の学生と交流したのは初めてだったので緊張感もありつつこの留学の主眼である多文化理解を深くすることができた。改善点としては、語学の授業が物足りなかったことである。担当教員はとても愉快な人であり不満はなかったが特にカタルーニャ語の授業は二日間であったという間であった。とはいえスペイン語もカタルーニャ語も国内で勉強できないわけではないので、現地での語学学習としては現地の学生と英語ではなくスペイン語ないしカタルーニャ語で交流したかった。また、個人的にはスペイン語の授業において、内容に不満はないが2年間履修しているにもかかわらず初級クラスに振り分けられたことが納得できなかった。

## ④ 進路への影響について

進路については、私は新4回生で就職か院進かを決めなければいけないが、いずれにしてもスペイン語だけではなく他の言語も習得するモチベーションが大いに高まった。スペインではないが、トランジットをしたカタルーニャではアラビア語が全く読めずに悔しい思いをし、前述のとおりスペインでは言語力不足によりもど

かしい思いをした。また、バルセロナ各地のチケット売り場やレストランで感じたこととして、“Hello!” と言うか “¡Hola!” , “Bon dia!” というかでその後の雰囲気が変わってくるので、現地の言葉を使うことがその国に敬意を表するということも体感できた。多くの言語を習得し、世界中をフィールドにすることを目指している。